



KISS § ICK

- DEATH -

shiroa

序

背後につねにゆらめく影。

どこにいても追いかけてくる、逃げ切ることのできない死。

小さなひとつひとつの物語は、死の側面を多面体のように映すだろう。

その奥にある”死”の実像が見えた時、

あなたは希望をみるだろうか、絶望をみるだろうか？

さあ、この痛みに満ちた世界へ。しばしの旅を。

case of "decision" #1

カラオケに行くことになった。

友人の家の近くにあるカラオケ店は、雑居ビルの割合上の階にある。

近い、ということでそこを選んだ。

縦に細長いビルだった。

階段も組めないのか、特に階段らしいものはなく、エレベーターで4階へ行った。

こんなビルが建築法に違反せずに建てられるのだろうか？

自分の専門分野ではないのでよくわからないが、不安になる。

隣の建物ともたいして離れていない。日照権は大丈夫なのか？

エレベーターの中で、こんな話をした。

「もし下の階で火事があったら、これ、死ぬね」

4階で受付を済ませ、7階の部屋を指定された。

再びエレベーターに乗る。

狭い部屋に男4人集まり、カラオケで盛り上がる。

お酒のつまみから揚げ、フライドポテトを注文。

時間はあっという間に過ぎ去っていく。

ジリリリリ.....

昔学校で聞いたことがある音だ。

友人がつぶやいた。「おれ、昔押したことがある。消火栓のところのボタン。あれに似てるな」

ははははは。

まさかね。そう思いながらみんなが笑う。

急に部屋の中の電話が鳴った。

「火事が発生したので、すぐに避難して下さい」

戦慄が走った。良からぬ想像が、現実になった.....。

「ここ、エレベーターしかなかったよな」

「わかんね。もしかしたら非常階段があるかも知れない、探そう」

荷物をもち、部屋を出てとりあえずエレベーターの前へ。
エレベーターは異常停止でもしているのか、想像通り動かない。
「階段、探そう」

頭の半分が真っ白になっている感覚がある。パニック、というものだろう。
必死で思考しようとするが、嫌な気持ちばかりが胸に湧いて来て、考えがまとまらない。
半分の思考の中、必死で階段を探す。

「おい、こっちだ！」

友人がフロア地図を左手で指さし、そこから導き出される非常階段の場所を右手で指さした。
そしてみんなでそこへ向かって走った。
嫌なにおいがする。どこで火災が発生したか分からないが、徐々に煙が上がってきているの
だろう。
しかし非常階段があるはずの場所に、扉らしきものは見つからなかった。

そこにはベニヤ板があり、宣伝のポスターが貼られ、その前には観葉植物が置かれている。
なぜか、古そうな、夜の飲み屋で見かけるようなボックス用の椅子が置いてある。

「ちくしょう、この裏だ！」

みんなで力を合わせ、その雑多なものをどけ、ベニヤ板を割り、なんとかどけようと頑張った。
ベニヤ板はご丁寧に廊下のサイズにほぼほぼ合わせて張りあわされており、指が隙間に入らず、
どけることができない。

「おいおい、これじゃ非常階段使わせない気満々じゃねーかよ！ ふざけやがって！」

煙の臭いが強くなってきた。まずい。かなり火が回ってきているのだ。
はやく消しとめてくれれば、助かるのだが。
友人の一人が近くの部屋に入り、フロントへ電話をしている。
しかし、電話は通じないようだった。

「避難するって！ どうしろってんだ！」

友人のひとりが部屋にあったテーブルに目をつけた。
スチールで組まれたテーブルの上にはガラスがのせてある。
そのガラスを取り外せば、一枚のガラス板になる。
結構な重さがある。

「これをぶつけて板を壊そうぜ」

ガラスが割れて危険、ということも顧みてられない、異常事態だ。

友人が思い切り勢いをつけてぶつけた。

派手な音がなり、ガラスが割れる。ベニヤ板にヒビが入り、少し曲がりが生じた。

「もう2発ほどお見舞いしたら、端から指をこじ入れてひっぺがせるんじゃないか！」

これが最早最上の策でもあるように、みんなはガラスの板を部屋から持ち出し、ベニヤ板に投げつけた。

奏功し、ベニヤ板をひっぺがすのになんとか成功した。

そして啞然となった。

case of "limit"

人間は生を受けた瞬間から、死に向かって生きている。
無限に生きることはできない体の仕組みを背負っている。

かつて人類は不老長寿を夢見て、あらゆる実験や研究がなされてきた。
優れた人物は――それがただ王族であるだけならば、それは傲慢であるが、
永遠に生きて人類の発展の為に帰依してもらいたい。

優れた人物がたかだか100年足らずの生で終わるというのはあまりにも人類にとって酷な話だ。

と、自分勝手に思ってしまう。”人間”としての利己的な視点だ。

死はリセットする。

しかし、意思は後輩たちに受け継がれていく。

ただ、その意思は決してオリジナルの意思では無く、違う意思が混じったものとなる。

そのため、当初の優れた意思は枯渇し、衰退するか。

化学反応を起こしてさらなる発展をみるか。

恐ろしいことに、すべては偶然に委ねられている。

その偶然が奇跡的に繋がり、今の人類が築いた文明があると考えれば、
そこには不思議な神の意志を感じずにはいられないだろう。

”ヘイフリック限界”という言葉がある。

人間は細胞の集まりで出来ているが、その細胞には細胞分裂の限界があるということだ。
細胞分裂を繰り返すたびにテロメアという細胞の尻尾が短くなり、やがて細胞は死滅する。

生まれた時から、時限装置を負って生きている、と言えるのだ。

しかし生殖細胞に含まれるテロメナーゼによってその限界は一度リセットされる。
それが新たな”子”が生まれる、ということだ。

一個体としては長くは生きられないが、子を作ることにより、

一度リセットは成されるとしても、遺伝子と人類という種の寿命を長くすることができる。

ではヘイフリック限界で生きられる限界というのは何歳までなのだろうか？

100歳を超え、いまだ元気に活動される人がある。

120歳くらいだろうか、音に聞こえるのは。

一説では140歳まで生きられる、という話を聞いたことがある。

脳を筋肉細胞と考えた時に、しっかりと働かせることで決して痴呆になることなく、しっかりと意思を持ち生存できるとか。

ただそれを聞いてハイポニカトマトを思い出す。

科学の力により、細胞の持つ力を十分発揮できる環境を整え、最大限に成長させたなら――。それは千の実を付ける巨大な木へと変貌した。

それを目にしたものは生物の持つ潜在能力が如何に制限されて生きているかを知った。

果たして。人間をハイポニカトマトのように限界まで――仮に140歳までとしよう、科学の力で生きられるようになったとしたら。

もしあなたなら “幸福な人生” を送ることができるだろうか？

case of "duel"

酷く誇りが傷つけられた。
このまま引き下がるわけにはいかない。

紳士として厳しく育てられてきた。
また、国に、家に恥じないように勉学に励んできた。
スポーツで体も鍛え、いつでも兵役に耐えうる力もつけてきたし、
軍を率いることになればと統率についても師より学んだ。
酒に溺れず、色に溺れず。
許嫁とはその家族ともよい関係で、相手も私に多大に期待を寄せいている。

そんな私が！
公衆の面前で、罵倒された。
理由はいたってくだらない。
酒場で出会った女が、私を見ていた。
俺の女を横取りしたな、という言いがかりだ。

相手は貴族ではあるが、悪い噂の絶えない半端な男である。
その場でねじふせても良かったが、暴力に訴えるのは紳士として礼に欠ける。
しかしこの気持ちをうちに秘めてこれからもこの街で生活するのは我慢ならない。
周囲の友も相手のただの被害妄想であると理解してくれているが、
一部では誤解している者もいるという。

高貴な未来を歩まねばならぬ自分が、そのような醜聞を負ってはならない。

これは正式に堂々と我が潔白を公衆に示さねばならない。

そのためには、決闘だ。

私は以上の理由を書に認め、使者をもって相手に送った。
そしてその申し出を相手も受けた。

―― 万に一つ、もしも私が死ぬことがあっても。私は後悔をしない。
このまま侮辱を晴らせないまま生きるのならば、私は喜んで死を選ぼう。

case of "sacrifice" #1

銃弾が足に当たり、俺はその場に倒れ込んだ。

「大丈夫か！」

仲間の声が遠くに聞こえる。

この声は、山下の声だろうか？

「先に、行け！ 俺に構うな！」

この場に留まることは全滅の危険を伴う。

自分は撃たれた。運が悪かった。

いや、戦争に来ているのだ。覚悟の上だ。

ただ、自分の為に他の仲間がやられるのだけは嫌だ。

「衛生兵もすぐ追いつく、木村が今ゲリラを探している」

銃声が聞こえた。

頭がぼーっとしてくる。血が失われていっているのだろう。

不思議なほど痛みは感じない。

ただ、眠気が急に襲ってきた。

足に銃弾を受けたくらいで人は死なない。

矢では無い、銃弾には毒は仕込めないのだ。

しかしそんな銃弾で倒れ、動けなくなるほど、俺の体は疲弊してしまっていたのだ。

「すまん」

足音が遠ざかる。

銃声が聞こえる。

鳥の鳴き声が聞こえる。

だんだん何も考えられなくなってきた。

”いい、これでいいんだ。みんなが助かってくれれば”

寒気がした。

そして遠い、はるか遠くの祖国にいる家族に思いを馳せた。

それから少しだけ。淋しいと思った。

case of "Capital Punishment"

テレビでニュースが流れているよ。

「判決は懲役20年……」

画面の中で泣き崩れる人がいるよ。

「最高裁まで闘います。極刑しか考えられません」

——もしも深い心の傷を負ったなら。

その加害者に対し、極刑というのが最も重い刑なのでしょうか？

のんびりと不足なく刑務所生活を楽しんでいる、そんな話を聞きます。

食べ物もおいしいらしい。

じゃ、死ね。死んでくれ。

そう思ってしまうかもしれません。

けれど、死ねば終わりでしょう。

死んでしまえば償いも出来ないのではないのでしょうか？

もしも私が遺族となり、深い傷を負い、犯人に対して望むとすれば——。

それは死刑ではありません。

私が臨むのは人権のはく奪です。

人権が無くなった人は “人間” ではありません。

“人間” でなければ、あらゆることが可能になるでしょう。

足りていない臓器移植のパーツにしたり。

新しい手術の練習台にしたり、新薬の研究に使ったり。

非人道的と呼ばれる行為がやり放題です。

……それは死よりも恐ろしいことでしょう。

私は極刑とはそこまでいいのではないかと思います。

そうすると。

人は過ちを犯しそうになった時、この極刑の形を思い出し、思いとどまる。

次の犯罪の抑制効果も生まれるでしょう。

ただ綺麗に苦しまずに殺してあげる。

そんなやさしいことであなたは満足でしょうか？

case of "nothing doing"

なにもしない。

なにもしない。

どちらもおなじでしょうか？

なにもしない。

なにもしないのはじぶんのところ。

じぶんがえらんでるせんたくし。

なにもしない。

なにもしないのはからめられたそくばく。

じぶんのところとはべつところにげんいんがあるのかな？

なにかできるようになろう。

そんないしきがなくてなにもしないのなら、

それはじぶんがえらんでるせんたくし。

そうではなくて、じぶんではなにかしようとしているけれど、

なにもしないのは、じぶんのそとにげんいんがあるのかな？

なにもしないとおもっても、

ほんとうはできることがむげんにある。

そんないしきをきくけれど、それにきづけないこともあるんだよね。

なにもしない。

なにもしない。

でも心臓はうごいてる。おなかはずく。

たべものはたべる。はいせつはおこなう。

なにもしない。

なにもしない。

なにかのためになることをしない。

だれかのためになることをしない。

ただただそこにそんざいしてる。

それだけのじぶんは、はたしてなにものなのだろう？

そこにいても、そこにいなくても。

なにもかわらない、なにもかわらない。

なにもかわらないのであれば、わたしはしんでいるのとおなじ？

ちょうのひとはばたきがせかいをかえるって。

わたしのそんざいがなにかをかえてるってほんとう？

ほんとうはなにもかわらない。

かわらない。

しんでののとおなじ。

でもちがうところがあって。

もしもなにかすることができたら。

なにかはじめることがこれからできたら。

それはしんでののとちがう。

しんでいれば、もうみらいになにもできない。

でもいきているから、みらいになにかできる。

なにもしないと、なにもできないはおなじ？

ちがうんだ。

いまいっぽふみだすゆうきをもつことができれば。

私は生き返る。

case of "sacrifice" #2

戦局は悪かった。

神風が吹く、その時まで我々は前線を維持しなければいけない。

しかし、日に日に状況は悪くなる。

そんな折、

ついに我々小隊の野営基地は放棄せざるを得なくなった。

戦略的撤退である。

後続に控える部隊と合流し、

1日でも長く本陣へ攻め込まれないように強固な壁を作るのだ。

しかしこの野営基地にはそれなりの銃火器を持ち運んでいる。

生き残った人員で手分けして持っても、かなりの量を残すことになる。

つまりこのまま攻め込まれば、我々の武器が敵に奪われ、

貧しい祖国が乏しい資金で作ったこれらの武器で、我々は脅かされるようになるのだ。

そこで作戦がたてられた。無駄にしても、敵に奪われてはいけない。

一人が爆薬を仕掛け、敵が攻め込み略奪をはじめたらボタンを押して敵ごと爆破する。

銃火器などはすべて焼け、敵の軍隊にもダメージを与えることができる。

しかしそれには一人の犠牲が伴う。

最大限の効果を期待するならば、ひとりが陣営に残り、様子を目視する。

敵小隊が集まったところでボタンを押せば、木っ端みじんにすることができるだろう。

その為に近くにいる必要があり、その爆発に自分も巻き込まれてしまう。

俺はそれを志願した。

「木村、やってくれるか」

「これで敵にひと泡吹かせることができ、戦局がひっくり返るなら。

それがしの命など惜しくありません」

戦局はひっくり返ることは無いだろう。しかし、足止めにはなる。

自分の命が犠牲になり、味方が助かるなら。

神風が吹くまでの時間稼ぎに、少しでもなるのなら。

この命は、惜しくは無い。

作戦は遂行された。

味方が総撤退し、しばらくすると、予想通り敵の小隊が陣営に攻め込んできた。はじめは警戒しながらだったが、だれもいないと分かると戦利品を漁ろうと、あらゆる場所を探り出した。

「万歳！」

俺は気合いと共にボタンを押した。

case of "fate"

ずっと夫に仕えてきました。
お見合いで知り合い、健康で経済力のある方だったので、
親戚も喜び、良縁だ良縁だとまわりは言ったものです。

仕事人間であった夫は、会社の要職にすぐに抜擢され、
家族を顧みず仕事に打ち込んでおりました。
たまの休日も、半ば強引に押し付けられた自治会の職で、
毎週のように出掛けており、ずっと仕事をしているようなものです。

来客があればその準備をし、おもてなしをするのがわたしの役目でありました。
大切な方をお招きするわけですから、掃除も行き届いていないといけませんし、
気の利いたお茶やお菓子、タバコにお酒と用意しないとといけません。
随分とその道の勉強をしたものです。

あっという間。そう表現するのが適当に思われます。
忘我であった。まさにそこには女としてのわたし。個人としてのわたしの意思はなかったように
思います。

でも必ず時は流れ、時が流れれば生活は変化して参ります。
わたしにはひとつの希望がありました。

夫の定年です。
夫が定年を迎えれば、仕事は綺麗に引退し、夫にも時間ができます。
そうしたら、わたしが行きたかった場所へ、一緒に旅行をしましょう。
そういう約束をしていました。

やがて定年を迎え、二人で伊豆へ旅行に行き、本当にゆったりと気持ちを落ち着かせて楽しむこ
とができました。
ああ、やっとなわたしの人生はここからはじまるんだ。
若い方はおかしいと思われるかも知れませんが、本当にそう思ったんですよ。

これから自分の人生が楽しめる。

――そう思った矢先。急に夫が倒れました。
いつものように元気に起き、散歩をして、笑顔で朝食を食べて。

そのあと、急に頭をおさえて電話に駆け寄ったかと思ったら。

ばたりと倒れ動くなくなってしまって。

すぐに救急車を呼びましたが意識は戻らず。

即死でした。

脳のどこだかの血管が爆発して。

また夫のためにバタバタと慌ただしく動きまわることになりました。

葬儀もそう。その後のお墓の問題もそう。

自治会の仕事は夫が自分でまとめて行っていたもので、わたしは全く分かりませんが、

それをいちから勉強し、わたしが引き継いでやらなければいけなくなったり。

ああ、わたしの人生は一体何だったんだろう？

ただただこれがわたしの宿運なののでしょうか？

心にぽかんと穴が開いたようで、まるで心に欠陥を負ったようで。

なんとか一日一日を消化する日々を過ごしています。

case of "decision" #2

そして啞然となった。

ベニヤ板で塞がれたその先は、もう使わなくなった、壊れたカラオケ機材が鯨詰め状態におかれていた。

処分に困り、物置場に困った店は、このスペースを殺して処分場に使っていたのだろう。

それを隠すためにベニヤ板で壁を作っていた……。

なんとかその機材をどかし、道を作る。

かなりの時間がかかったが、なんとか非常階段の扉までやってくることができた。

「よし、逃げよう！」

扉を開けると熱気が立ち上っているのが分かった。外の景色がゆらゆらしている。

戦慄が走った。嫌な考えが頭をよぎる。

もう、火の手はすぐそこまで迫っていたのかも知れない。

「ちょっと待ってろ。俺が先に行ってみる」

一人が果敢に下に降りていった。

その後、「うわっ、下から火が出てる！」という声が聞えた。

階段を駆け上がる、カンカンカンカンという音がしばらくしたと思ったら、ぱたりと止んだ。

しばらく待ったが、戻ってこなかった。

「多分、下の階のヤツは、非常口のドアを開けたまま逃げやがったんだ。それで火がそこから噴き出してるんじゃないか？」

友人のひとりはその火から立ち上る煙、その中に含まれる一酸化炭素にやられたのかも知れない。

「上に行こう」

この階にいてもダメ。下もダメ。ならば上しかない。

残った3人で口元を袖口でおさえながら階段を上った。

そして屋上に出た。

火は着実に上に登ってきている。煙の量も増えている。

はやく消防車はこないのだろうか？
火が足元を焼く前に、到着するだろうか？

そもそも、もう消防署へは通報されているのだろうか？

友人の一人が携帯を使い、消防署へ電話をした。
もう一人の友人は彼女に電話をかけている。

”俺、もう死ぬかもしれない”

そんなフレーズが聞えた。
消防署へ電話をした友人は蒼褪めた顔でこういった。

「この火事の通報、受けて無かったって」
店の人たちは、自分達が逃げるのが優先で、通報を忘れてしまっていたらしい。
あの非常階段の前の状態をみれば納得がいく。

「でも、すぐ来てくれるんだろう？」

もちろんすぐにやってきてくれるに決まってる。
でも、それまでの時間、果たして生き延びることができるのか？

爆発音が聞こえた。
足元に熱を感じる。
その熱はじょじょに立っていられないほどになってきた。

下の階は完全に火の海なのだろう。

もう、待てない。

このまま苦しみながら焼け死ぬのか、いっそ飛び降り、奇跡的な生き残りを期待するのか？

それにしても、大怪我は避けられない。
足から飛び下りれば頭は助かるかもしれないが、下半身は無事ではいけない。
そうなれば、車椅子で生涯生活を送ることになるだろう。

いっそ、頭から飛び下りて、死ぬのが楽か。

友人が飛び降りた。

もうひとり、飛び降りた。か細い悲鳴が一瞬、聞えた。

靴のゴムはべっとりと溶けてきた。もう、立ってもいけない。

決断する時が、来た――。

case of "explosion"

いいことも、悪いことも。
今日の成果も、未来の幸福も。

将来のためにエコに励み、未来に生きる子孫たちが安逸に生活できるように。
より便利に発展的に、元気に長生きできるように。

人は未来につなぐ仕事を日々、営んでいます。

人の心を打つ芸術作品。
その作品は後世に残していこうと大切に保存されます。
世界遺産というのは歴史的、文化的な遺産を世界規模で保存していこうという働きです。

けれどもその未来。
科学の世界ではこんなことが予測されています。

太陽が膨張し、その中に地球が飲まれて消えてしまう――。
実際に太陽がある程度膨張すれば、その熱で地球は生命の天体として生きることではできなくなるでしょう。

また、太陽が爆発する、とも予想されています。
地球はおろか、太陽系もいずれ消えてしまうのです。

もちろん遠い未来の話。
もしかしたら、それが実現する前に、人類自体が減っている可能性もあります。

いずれにせよ、どんなに大切に保存したところで、
必ず太陽は死に、地球は消える時が来るのです。

だから一切のことは無駄なのでしょうか？
けっしてそうは思いません。

それでも今、確かに意思を持ち生きているわたしたちがいるのですから。

わたしたちにとって大切なことは、より "今" という時間を大切にし、有益にしていくことだと思ふのです。

case of "game"

仕事から帰ると少なからず重い気持ちを引きずっている。
そんな気持ちを少しでも晴らそうと、テレビの前へ。

ゲーム機の電源を入れると軽快な音楽が流れる。
プレイヤーを選択し、ゲームの中の戦場へ出掛けた。

アサルトライフルが火を吹くと、群がるキャラクターがばたばたと倒れ消えていく。
画面左上のカウンターの数がどんどんと増えていく。

100、200、300.....

笑えてくる。どんな世界に、どんな豪傑がこんな短時間にこれほどの人を殺せる？

やがて操作していたキャラクターが倒れた。
画面は狙撃した敵兵をアップで表示する。
どうやら今回は死角から撃たれたようだ。この方向の敵に気をつけないとな。

「GAME OVER」の文字が踊る。

気持ちは少しだけ和らいだらうか。
現実と、ゲームは違う。
現実をゲームとして考えると、少しはマシになるか？

テレビをつけると仕事のニュースが流れた。
「カラオケ店で発生した火災の続報です。被害は広がり死傷者は12名に.....」
気持ちが重くなる。

今回もうまくできたのだろうか？
これは3度目の仕事。
いつここに警察が踏み込んでくるか、それを考えると気持ちはまた重くなった。

case of "future"

葬式に行きお坊さんの話を聞くと、人は死んでから霊となって修行をするそうだ。四十九日修行を終えると晴れて仏になるという。

ばかげている。

釈迦は悟りをひらいて仏になっらしい。
今でもその教えが生きていて、人々の生活の中に貢献している。
そんな偉い人である釈迦が仏というのは納得できる。
すごい人なんだから。

でも、近所の酒ばかり呑んで、動物と子供をいじめて、
借金もたくさんあって、外に出てはギャンブルやって。
そんなやつが死んでたかだか四十九日で仏になるなんて信じられない。

もし本当にそんなやつが仏になるんだったら、
僕はそんな仏の世話になりたくはない。願い下げだ。

死んだら人は天国に行くという。
良い行いをしていたら天国にいける、その良い行いは考え方によって違うはずだ。
処刑人は人を公然と殺す公務員。
ヨーロッパでは世襲制だったって話だけれど。
うまれつきそういう人は地獄に行くのだろうか。
その家系は公務としての殺人だから "良い行い"と解釈されるのか？

ノーベルはダイナマイトを発明して。
人類の大きな発展に貢献したけれど。
ノーベルは天国にいるのだろうか？
その後ダイナマイトは人をたくさん殺したけれど、
ノーベルは地獄に編入したのだろうか？

よくわからない。
けど、ひとつだけはっきり言えることがある。

死んだあとのことをとやかく考える前に、
僕は今を必死で生きを考える。

例えその先に天国があったとしても、地獄に行く運命だったとしても。
僕はそれに甘んじて従おう。

生きている今、その時間を無駄にせずに過ごしていくことが、
生きている自分の人生を、輝かせることにつながるから。

地位もや富は関係ない。
今を誰かの為に、何かの為に一生懸命生きることが、生を強烈に輝かせる。

それを知っているならば、誰だって幸せになれるはずだ。
誰だって、死を恐れずに、今の生を必死に生きられるはず。

——これは僕の願いだ。